JRA 患者における運動の影響

福岡大学小児科 小 田 禎 一

〔方 法〕

9例の JRA 患児(うち2～5才4名，6～10才5名)について，日常可能なかぎり最大限の運動を行わせ，経過を観察した。なお，機能障害程度(class)は1が3名，2が5名，3が1名であった。また，病期(stage)は，Iが8名，IIIが1名であった(Steinbrocker 基準による)。

〔結 果〕

上記のうち，リハビリテーション期間内に CRP が持続的に陰性であったものは1名だけであった。

Stage III の1名を除いて，全員正規の体育，運動会，登山，遠足，水泳等に参加させたが，それによって活動性および関節症状が悪化した例はなかった。

10才男児(class 2, stage I，全身型)では，下熱後赤沈促進，CRP 陽性が持続したが，登校させ，積極的に運動させた。しかし，18キロ遠足，自転車遠足，マラソン，キャンプ，1,000m 級の登山でも，関節症状(右足，右手)が悪化することなく，むしろ次第に軽快した。アスピリン，イブプロフェン，パンテチンの持続投薬を減量すると，間もなく右足関節が腫脹し，赤沈が促進したが，再増量によって軽快した。この例では，症状の再燃は運動と無関係で，薬剤減量によるものと結論された。

Stage III の例も，積極的な体操，ぶらさがり器などで毎日リハビリテーションを行っており，不自由ながら元気に登校している。

〔結 論〕

JRA 患児は，急性期を除いて，高度の運動をさせることが可能で，赤沈促進，CRP 陽性，中等度の痛みは運動の禁忌とならない。また，運動によって症状，検査所見が悪化する例はみられなかった。

若年性関節リウマチ患者の心理調査

東京共済病院小児科 藤 川 敏
日本大学小児科 大 国 真 彦
疋 田 博 之

〔緒 言〕

若年性関節リウマチ(JRA)は慢性経過をとりその約1/3は成人の慢性関節リウマチに移行し，数年～数十年間の治療を必要とする。この間には入院を反復し，関節機能障害，変形も伴い，手術を要する例も多い。

その結果，通常の学校生活，社会生活は限定される。このため，うつ状態，不安状態，ヒステリーなどの精神障害が出現することも当然予想される。

本研究の目的は現在および将来，免疫に対して大きな不安をかかえている子供たちがどのような心理状態にあるかを調査し，予想される精神障害を予防するための指導方法を検討する。

〔対 象〕

日本大学板橋病院小児科および東京共済病院小児科で治療した JRA 患者および他の膠原病患者を対象とした。

〔研究方法〕

下記の6種類のアンケートおよび心理テストを行った。また心理テストの分析は日大心療内科の心理療法士に依頼した。

1. アンケート調査(表1)

表 1 アンケート調査表

名　前

生年月日　昭和　年　月　日　(　才)

1. あなたがリウマチ（膠原病）の症状が初めて出現したのはいつ頃ですか。

昭和　年　月　日頃（　才　月）

2. 今どんな症状がありますか。○をつけて下さい。
   a. 4つ以上の関節にいつも症状が続いている。
   b. 4つ以下の関節に（例えば　ひざ，足首）大体いつも症状がある。
   c. 発熱や発疹をくり返すが関節の症状は軽い。
   d. その他（具体的に書いて下さい　　　　）
3. 入院についてお答え下さい。
   a. 今まで何回入院しましたか。 ________回
   b. 入院日数を合計（通算）すると何ヵ月位になりますか。 ________ヵ月
4. 最近1年間で何回入院しましたか。 ________回

   それは通算何ヵ月位ですか。 ________ヵ月
5. 最近1年間リウマチのためにだいたいどの位学校（幼稚園，職場など）を休みましたか。
   a. 病気の症状のため休んだ日数（入院を除く） ________日
   b. 定期的な通院のため休んだ日数 ________日
   c. 休学中
6. 今まで関節の手術を受けましたか。

   は　い　（それは何才でしたか，________才　どの関節ですか________）

   いいえ
7. 現在どのような症状がありますか。
   a. 発熱　（いつも　時々　なし）
   b. 朝のこわばり　（あり　なし）
   c. 眼の合併症　（あり　なし）

      “あり”と答えた方は何ですか________
   d. 関節の変形がありますか。

      あり　どの関節ですか。

      なし
8. 現在の関節の機能はどの程度ですか。
   a. 健康人とほとんど同様でまったく完全である。
   b. 少数関節に運動制限があっても普通の生活ができる。
   c. 普通の作業や身のまわりのことができず，または困難である。
   d. 身のまわりのことがほとんどできないで，ねたきりか歩行車を使っている。
9. あなたは病気についてどのように考えていますか。
   a. とても気になる　b. ちょっと気になる
   c. あまり気にならない　d. わからない
10. あなたは病気のため上級学校，就職，結婚についてどう考えていますか。
    a. まったくあきらめている。
    b. 病気の状態にもよるができれば進みたい。
    c. 今では進めると思うがやや不安はある。
    d. まったく気にしていない。
    e. その他（　　　　）

表 2　セルフ・イメージテスト

名　前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿年令＿＿＿＿＿＿＿

自分のかんじをあらわすと思う場所に○をつけて下さい。

（注）大きい—小さいと言うのは，じっさいの体の大きさではなく，あなたが自分自身について感じている「印象（いんしょう）」「感（かん）じ」「イメージ」をあらわします。その他も同じです。

		とても	すこし	どちらともいえない	すこし	とても	
1.	大きい						小さい
2.	まっすぐな						まがった
3.	ひろがった						ちぢまった
4.	ていねいな						ざつな
5.	かたい						やわらかい
6.	のびのびした						いじけた
7.	明るい						暗　い
8.	あつい						うすい
9.	ありふれた						めずらしい
10.	きちんとした						ずぼらな
11.	陽気な						陰気な
12.	はげしい						おだやかな
13.	すぐれた						おとった
14.	たのしい						くるしい
15.	びんかんな						どんかんな
16.	強　い						弱　い
17.	あたたかい						つめたい
18.	丸　い						四角い
19.	せかせかした						おっとりした
20.	ざらざらした						なめらかな
21.	重　い						軽　い
22.	かんたんな						こみいった
23.	動きのある						静かな
24.	美しい						みにくい
25.	しんちょうな						けいそつな

表 3　症例と結果

症例	病名	年令	病歴	現在の症状	クラス	入院回数	入院日数	最近，1年入院日数	病気欠席	通院日数	関節変形	病気について不安	将来について	Y–G	田研親子関係	
Y.H.	若年性関節リウマチ	7才	4年3月	c	I	0	0	0	40日	14日	なし	a	c	C′ のんきでない協調的	厳格	期待，不安
H.H.	〃	11才	8年10月	ほとんどなし	I	4	11ヵ月	0	0	10日	なし	b	c	C のんきさ，活動性	厳格，溺愛	厳格
Y.S.	〃	5才	2年8月	a	II	1	1ヵ月	0	7日	11日	あり	a	c	C 協調，思考外向	積極的拒否，不安，溺愛，盲従	積極的拒否，溺愛
Y.S.	〃	9才	5年10月	b	II	4	45ヵ月	5ヵ月	16日	17日	あり	b	b	D 協調，支配性	溺愛	溺愛
M.T.	〃	12才	7年5月	ほとんどなし	I	1	2ヵ月	0	2日	7日	なし	c	d	D′ 社会的外向，のんき	溺愛	
M.O.	〃	12才	5年8月	ほとんどなし	I	2	9ヵ月	0	0	20日	なし	b	c	AB 思考外向，社会的外向	溺愛，消極的拒否，積極的拒否	消極的拒否，積極的拒否
S.S.	〃	15才	13年	ほとんどなし	I	2	16ヵ月	0	5日	6日	なし	a	c	D′ 攻撃，思考外向，社会外向	消極的拒否，厳格，期待，不安	厳格
E.I.	〃	21才	11年	ほとんどなし	I	1	6ヵ月	0	0	4日	なし	b	c	C 協調	盲従	
Y.N.	〃	18才	6年2ヵ月	a	II	2	8ヵ月	0	15日	10日	あり	a	b	D′ 社会的外向，支配性		
K.K.	〃	21才	10年	a	III	2	15ヵ月	0	0	15日	あり	a	a	C′ 協調	消極的拒否	
H.H.	〃	12才	6ヵ月	c	I	1	6ヵ月	6ヵ月	入院中		なし	b	b	E 主観性，非活動	積極的拒否，溺愛	溺愛，盲従
H.S.	〃	14才	9ヵ月	b	II	1	2ヵ月	2ヵ月	入院中		あり	a	b	D′ 社会的外向，支配性	消極的拒否，溺愛	
Y.T.	若年性関節リウマチ	12才	11年	ほとんどなし	I	5	10ヵ月	0	0	24日	なし	c	d	D 支配性，社会的外向性	消極的拒否，積極的拒否	
T.H.	〃	17才	6年	ほとんどなし	I	2	3ヵ月	0	0	5日	なし	a	a	E 非協調		
M.O.	〃	10才	1年	ほとんどなし	I	1	3ヵ月	1	120日	10日	なし	a	b	C 非活動		
K.K.	皮膚筋炎	7才	6年	筋力低下		2	6ヵ月	0	14日	24日	なし	a	b	C 協調	盲従	
Y.M.	全身性エリテマトーデス	16才	5年	腎炎，肝炎		7	23ヵ月	1ヵ月	15日	20日	なし	b	d	AB のんきさ，思考外向	消極的拒否，積極的拒否，厳格	消極的拒否 厳格，期待，盲従
K.T.	大動脈炎症候群	21才	7年	視力低下 関節炎		8	27ヵ月	6ヵ月	入院中		なし	c	b			
E.S.	強皮症	14才	7年	皮膚硬化		0	0	0	0	7日	なし	b	d	C 非活動性	溺愛	不安，溺愛，盲従
H.S.	全身性エリテマトーデス	12才	2年	腎炎		1	3ヵ月	1	3ヵ月	15日	なし			A′ 非活動服従		干渉，溺愛

病状を知るため現在の症状，過去の入院回数，通算入院期間，最近1年間の入院回数と期間，学校の欠席日数，通院回数，関節手術の既往，現在の全身症状，関節機能（クラス1～4），および病気についての不安度（a>b>c），将来についての不安度（a>b>c>d）の各項目について調査した。

2. YG テスト
3. PF スタディ
4. 田研式親子関係テスト
5. S-D イメージテスト（表2）
　日本大学医学部心療内科，中村延江らにより考案されたセルフ・イメージテスト
6. バウムテスト

〔結　果〕

回答が得られた症例は JRA 15例，他の膠原病5例であった。これは調査が多種におよんだため回答率が少なかったものと思われた。結果は表3に示したごとくで病気についての不安は（a>b>c の順に不安が強い），20例中18例が a，b を回答した。

しかし将来に対する不安は（a>b>c>d の順に不安が強い）a，b と回答したものは8例であった。

関節機能クラスⅠの10例では病気に対する不安は a が4例，b が4例，c が2例，クラスⅡでは4例中3例が a と回答していた。将来に対する不安はクラスⅠでは2例が a，2例が b，と回答していたが残りは c または d であった。

入院回数，病歴の長さとは特に相関はみられなかった。各心理テストについては年令，クラス，病歴による差はみられなかったが，次のようなことが共通して認められた。

1. PF スタディおよび Baum テスト

反応型は要求固執，攻撃方向は他罰型が多く，これは欲求不満，闘争の原因を自分の責任とみるが問題解決を他に依存する傾向が強く自己を積極的に守れない社会性の発達が未熟な点がみられる。Baum テストでも共通した傾向がみられ，情緒的な不安定はないが，問題があった時，自己の力で切り抜けるバイタリティは少ない。

2. Y-G テスト

情緒安定型がほとんどであり，協調的，社会的外向のものが多い。攻撃性を示したものはほとんどなかった。

3. 田研式親子関係テスト

親の態度に拒否，溺愛が多く，また厳格もやや多かった。干渉，不安，期待は少なかった。

4. S-D セルフ・イメージテスト

自己評価と客観的評価（テストの上から）の一致率が高く，自己を positive にとらえているものが多かった。しかし強さ，広がり，バイタリティ，自己洞察の面では不一致がややみられた。

〔考按とまとめ〕

慢性経過をとり疼痛，関節運動障害などに苦しむ JRA の子供たちが今回の心理テストでは回答が得られた少数例からは心理面から協調性があり，情緒不安定なものや攻撃的な傾向を示すものが少なかった。

両親が溺愛の傾向がみられたことはある程度うなづけるが，一方厳格的な面も多くみられた。

これらのデーターから今後の生活指導，心理指導が可能となれば幸いである。

「若年性関節リウマチの生活指導指針」に関する研究

国立大阪南病院整形外科　前　田　　晃

若年性関節リウマチ（JRA）に対し，本年度は成人に達した患者にアンケートを配布して，医学的，社会的問題を検索した。

昭和36年以降，大阪大学整形外科リウマチクリニック，国立白浜温泉病院および国立大阪南病院を受診した JRA 患者は100症例を超える。今回配布した総数の約60%にアンケート回答を得た。男子19名，女子42名であり，発病年令はそれぞれ9.7才，10.1才であり，比較的高年令発病の者が多い。最終診察時あるいは退院時の年令は男性19.1才，女性21.2才であり，今回の調査時までの平均追跡年月はそれぞれ8.8年，9.5年で，男女一群とすれば9.1年であった。

今回は教育期間の休学の有無，勉学の不自由さの有無，最終卒業学校，職業の有無，関節変形の存在の有無，リ

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔緒言〕

若年性関節リウマチ(JRA)は慢性経過をとりその約 1/3 は成人の慢性関節リウマチに移行し,数年～数十年間の治療を必要とする。この間には入院を反復し,関節機能障害,変形も伴い,手術を要する例も多い。

その結果,通常の学校生活,社会生活は限定される。このため,うつ状態,不安状態,ヒステリーなどの精神障害が出現することも当然予想される。

本研究の目的は現在および将来,免疫に対して大きな不安をかかえている子供たちがどのような心理状態にあるかを調査し,予想される精神障害を予防するための指導方法を検討する。